

日本社会心理学会会報

235号



発行 日本社会心理学会 <https://www.socialpsychology.jp/>
編集・制作 広報委員会 (担当常任理事: 内田由紀子)

2025年6月30日

第33期役員あいさつ

2025年4月より第33期役員体制が始動しました。西田会長ならびに6名の常任理事から会員の皆様へ、ご挨拶を申し上げるとともに、学会全体と今後の活動についてご説明いたします。

会長

西田 公昭

33期の会長に就任いたしましたことを、会員の皆さまにご挨拶申し上げます。旧期から引き続き、この任務に当たることとなりましたので、何卒よろしくお願い申し上げます。

この2年を振り返りますと、まず、機関誌「社会心理学研究」は危機的な状況にありましたが、どうにか持ち直しました。広報部門では、WEBがリニューアルされて見やすくなりました。研究支援では、学会発表支援や若手研究者奨励賞など、ニーズの変化を鑑みながら進めてまいりました。学会活動支援では、オンラインセミナーを開催し、多くの参加者から好評をいただきました。そして、大会支援では、開催大学の協力や気象変動による運営など、とても厄介な問題に直面しましたが、どうにかそれも乗り越えました。しかしながら、当会を取り巻く環境は常に変化しており、将来を見据えると、改革を必要とする運営事項も多々あることが認識されています。

ところで、日本社会心理学会は、私の誕生年である1960年に設立され、現在では約1600名の会員が活発に活動しています。会員の皆さまの熱心な研究成果に支えられ、これまでの発展を遂げてきた証拠だと思えます。ただ、大きくなっただけに懇親会などでじっくりと交流する機会を得ることが困難になりました。研究や教育において、仲間は何を求めることになるかわからないものですが、いつか本格的に向き合う日に備えて、狭い知己に偏らず、お互いの取り組んでいる研究テーマを超えて関心を広め、研鑽しておくことは大事ですし、そこで育まれる信頼関係は、人材雇用の時の基礎にもなるでしょう。そんな機会を増やしたいと望んで良い知恵を模索しています。また、今期の新たな抱負として、時代の変化を踏まえ、各運営事項において柔軟に改善を図るとともに、社会心理学という学問の存在意義をさらに広く社会にアピールしていくことを掲げたいと思います。私見ではありますが、これまでの科学的謙虚さを大切にしつつも、あまり厳密さにとらわれ過ぎず、各自の専門分野における研究の知見から推測できる社会問題に対する意見を大胆に表明する姿勢を持つべきだと考えています。

どうか、どなたさまにおかれましても、お目にかかることがあれば、どうかお気軽に話しかけていただき、ご意見やお知恵を拝借したいと思います。以上、会長就任のご挨拶とさせていただきます。

(にしだ きみあき・立正大学)



事務局担当

高橋 尚也

このたび事務局を担当することとなりました高橋尚也です。よろしくお申し上げます。これまで学会では、どちらかといえば参加者としてメリットを享受する立場にありました。第60回(2019年)大会で事務局を担当しましたが、学内の事務的調整が主たる役割…という感じでした。そんな私が、よもや学会を運営する側に立つとは想定していませんでしたが、経験豊富なほかの常任理事の先生方、国際文献社のみなさまの力をお借りし、微力ですが、よりよい学会運営につとめていく所存です。



個人的な話で恐縮ですが、2024年度は大学からサバティカルをいただき、豪メルボルンに滞在していました。帰国直前の3月に前任の谷口先生から、Zoomを通して事務局の詳細な引き継ぎを受け、(覚悟はしていたものの)目を配る範囲の広さに、一瞬にして「日本モード」に切り替わったのを覚えています。

さて、事務局担当といえば、会員のみなさんの学会活動がつつがなく進むことを支える役割と認識しています。引き継ぎ資料からは歴代の執行部の先生方のご努力のあとを伺い知ることができました。また、社会心理学会の将来に目を向けたとき、会員数の減少など対応すべきこともあると認識しています。

各委員会や会員のみなさまが、状況や環境に応じて「やりたい」学会活動を展開しようとしたとき、それをできる限り実現できるよう、物理的に西田会長の近くにいるという「地の利」を生かして、取り組んでいきたいと考えております。同じく事務局幹事には山田順子先生(立正大学)にお願いしました。

おそらく理事の中でも私が最も軽量級だろうと思います。そのぶん、会員のみなさんからも言いたいことを伝えていただくと期待していますので、ご意見は何なりとお寄せください。そして、運営にはなにとぞ協力いただけますよう、よろしくお願い致します。

(たかはし なおや・立正大学)

編集担当

相馬 敏彦

社会心理学研究の論文投稿数、掲載数が急激に回復しつつあることをご存知でしょうか?経緯をあまりご存じない方もいらっしゃるかもしれませんので、簡単に説明いたしますと、数年来、本誌は存亡の危機にありました。論文が投稿されなくなっていたのです。当時発刊された冊子の薄さに驚かれた方もいらしたかもしれません。この危機的状況に対して、結城雅樹・前編集担当常任理事を中心に前期編集委員会が立ち上がり、本気の改革を実行しました。修正方針を大きく変更したのです。詳しくは、ぜひ以下の文書をご覧ください。



[査読方針についてのお願い](#)

その結果として、投稿数、掲載数、そして採択率は回復しつつあります。多くの方が投稿したくなるような雑誌に戻つつある、という現状のご報告でした。

ここからが新編集担当としてのご挨拶です（前置きが長くてすみません）。上記のように、前期編集委員会のご尽力により、専門誌を通じて社会心理学の価値を社会に問う、という本誌の意義が再び発揮されつつあります。したがって、今期もこの査読方針が変わることはありません。減点主義から加点主義へという方向の下、最低限のクオリティーコントロールを果たす、という方針を踏襲します。先日の第一回編集委員会でもこの点は強く確認されました。会員のみなさま、お手元のデータやアイデアを公刊される際には、どうぞ社会心理学研究を投稿先候補に加えてください（できれば上位で！）。

本誌は、英文で書かれた論文の投稿（原著、資料、総説いずれで）も受け付けております。日本語による査読プロセスを経て、掲載されたあかつきには Scopus 掲載論文として、費用負担なく、広く世界にその成果を問うことが可能です。

前期からの方針の徹底に加え、今期は審査の迅速化を図りたいと思います。これまでも決して審査に時間を要していたわけではありません。しかし、早いフィードバックを待ち望む気持ちは、投稿経験者なら誰でもわかるでしょう。そこで、投稿から採否決定までのスピードを短縮します。また、社会的インパクトを少しでも高めるための改善もいたします。現在、それぞれ準備を進めているところです。総会等で改めてご報告したいと思います。

（そうま としひこ・広島大学）

研究支援担当

山下 玲子

このたび、第 32 期より継続して第 33 期も研究支援を担当させていただくことになりました。研究支援では、大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度、若手研究者奨励賞の選考、および日本学術振興会・育志賞の推薦を担当しています。

大学院生・若手海外学会発表支援制度は、第 32 期任期中に大きな規定変更を行い、昨今の海外学会・国際大会の開催状況や開催方法に合わせて支援の形を広げました。その結果、2023 年度にはそれぞれ 5 名、6 名の方を支援いたしました。また、若手研究者奨励賞は、2023 年度に 8 件、2024 年度に 7 件に対して授賞いたしました。そして、育志賞も 2023 年度に学会推薦の 1 名の方が受賞されました。このように若手の皆様の研究における活躍は目覚ましいものがあり、支援担当として大変嬉しい限りです。

その一方で、応募者の属性に偏りが見られます。海外学会発表支援制度では、2 年連続で大学院生ではない若手の方々からの応募が 1 件もなく、また、若手研究者奨励賞も、修士 1 年の方からの応募が複数見られる一方で、博士後期課程修了後の方々からの応募がほとんど見られません。このように超アーリーキャリアの方々からの応募が活況である中、研究者として独り立ちする段階の方々への支援が十分に行き届いていないのではないかと懸念を抱きました。もちろん、これらの制度・賞への応募は自己申告が基本であり、支援を希望しないところには届きません。しかしながら、制度に申請ができない程の困窮状態に陥っている方がいるのではないかと、ポストドクや非常勤で教鞭を取りながら研究を続けている方がより活用しやすい支援の在り方があるのではないかと、ということ強く感じました。ご縁があり 2 期続けて同じ担当常任理事を拝命しましたので、このような問題意識にも応えられるように、制度のより良い運用を目指して任務に当たりたいと思います。会員の皆様におかれましては、ご指導、ご鞭撻のほど、よろしく願いいたします。

（やました れいこ・東京経済大学）



学会活動担当

宮本 聡介

第32期の学会活動担当常任理事に任命されました、明治学院大学の宮本です。第29期に広報担当、第30期には事務局担当の常任理事を務めましたので、「ベテラン」と言っていたかもしれませんが、実のところ学会活動に関してはいまだにルーキー気分が抜けません。



第30期(2019年)の年度末に突如COVID-19が猛威を振るい、以降数年間は大会をオンラインで開催するなど、従来通りの学術活動が難しい時期が続きました。学会活動委員会が手がける大きな行事のひとつに「春の方法論セミナー」があります。第1回(2014年度)から対面形式での開催を続けていましたが、COVID-19のため2020年度は中止を余儀なくされました。その後は対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド形式で開催しています。私も今期の2年間は、このハイブリッドを軸に、より多くの皆さまにご参加いただける企画を進めてまいります。33期の学会活動委員会では、小林知博(神戸女学院大学)、古村健太郎(弘前大学)、原田知佳(名城大学)、菅さやか(慶應義塾大学)、川上直秋(筑波大学)の5名の先生方に委員をお引き受けいただきました。この5名の先生方とともに次回の春のセミナーの内容を検討し、12月頃には年度末セミナーの詳細をお知らせできればと思っています。どうぞご期待ください。

また、昨年度から新たに「交流活性化支援制度」を創設しました。対面での研究交流を支援するため、1件あたり最大3万円の助成金をお出ししています。昨年度は10件のご応募をいただきました。申請方法の詳細は[こちら](#)をご覧ください。応募をお待ちしております。

(みやもと そうすけ・明治学院大学)

広報担当

内田 由紀子

33期広報担当理事をさせていただくことになりました、内田由紀子です。32期からの引き継ぎの担当となります。どうぞよろしくお願いいたします。



広報活動のメインは、(1)メールニュース配信(2)SNS配信(3)ウェブサイト情報発信(4)会報作成、です。

メールニュースはおかげさまで、いつもコンスタントに配信依頼があります。33期では浅井暢子先生にご担当いただきます。私も自分が広報担当になるまで理解していなかったことなのですが、実はこちらは機械的な配信ではございません。メールニュース配信依頼をいただいたら、内容を確認し、手作業で対応して配信登録しております。そのため、できる限り迅速に対応するようにはしておりますが、長期のお休みや土日祝日には多少のラグが出てくることをご承知いただければと思います。メールニュースはイベントや公募情報その他、学会員にとってメリットとなるような情報を共有いただくことで、学会活動を活性化させていただいております。これからも何かあればどうぞ活用ください!

SNSについては状況が変化し続けておりますが、迅速に配信できるという点でも活躍場面の多いものです。昨年度の大会の中止にかかる案件や、受賞報告などは、できる限りの情報を発信するようにはしてまいりました。今期の担当は縄田健悟先生です。SNSのご経験も豊富ですので、安心してお任せしたいと思っております。

32期の間に新しいウェブサイトが立ち上がり、順調に運営できております。現状では国際誌掲載情報の登録を小宮あすか先

生にお願いしております。先日メールニュースでも配信しました通り、皆様から国際誌への掲載のご登録情報をいただければ、情報を掲載させていただきます。最近では掲載される学術誌の幅も量も広がっていると思いますので、是非ともご共有いただけると嬉しいです。

最後に会報です。32期では、原稿集めから編集まで私が引き受けておりましたが、今期から橋本博文先生に編集校正を分担いただけることになり、かなり肩の荷がおりました。前期から、会報になるべく写真をいれるようにし、個人情報(異動・入退会)の掲載を停止するなど、細かい工夫はいたしました。基本的にはほぼこれまでの方法やコンテンツを踏襲しております。もっとこういう情報をいれてほしい!というご希望あればお知らせください。会報の編集をしていると、いろいろな先生方とのやりとりの機会が増えますし、素晴らしい原稿を先に読めるという役得があります!

生の声の大切さを実感することが多くなってきました。皆様の活動や学会情報の共有に取り組んでいきたいと思っておりますので、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

(うちだ ゆきこ・京都大学)

大会運営担当

小川 一美

32期から継続して大会運営担当を務めます小川一美です。留年となった一因は、第65回大会を襲ったあの気まぐれ台風『サンサン』かもしれません。岡隆先生をはじめ日本大学のスタッフの皆様は、長期にわたり対面大会の様々なご準備をしてくださったにもかかわらず、迅速かつ冷静にオンライン・オンデマンド開催へ切り替えてくださいました。改めて心より御礼申し上げます。恐らく私は、第65回大会での心残りを第66、67回大会に活かすようにという使命を授かったのだと思いますので、引き続き主催校を精一杯サポートし、年次大会の円滑な運営を目指します。



さて、以前に増して団体等による銀行口座の新規開設が容易ではなくなり、これまでも主催校の先生方には大変なお手間をおかけしてきましたが、大会運営用の銀行口座を学会として開設することができました。また、第65回大会では運営業務の一部が Professional Congress Organization に委託されました。残念ながら対面大会ではなくなったため、本領発揮とまではいかなかったのかもしれませんが、急遽のオンライン・オンデマンド大会への切り替えにも即座にご対応くださり、国際文献社様同様、さすがプロと感服いたしました。第66回大会も Float Leaf Creation 様に一部業務を委託される予定です。効果的かつ効率的な大会運営を目指し、大会運営委員会としても引き続き検討と実行を重ねてまいります。また、研究仲間同士や、複数校で協力して大会を開催することなども可能です。大会主催にご関心がある方がいらっしゃれば、ご質問やご相談もお待ちしております。どうぞお気軽に小川までご連絡ください。

最後になりましたが、今期も大会運営委員会は強力布陣となっております。32期からの継続で吉澤寛之先生(岐阜大学)、理事として西村太志先生(広島国際大学)と竹橋洋毅先生(奈良女子大学)、第66回大会準備委員会から唐沢かおり先生(東京大学)と村本由紀子先生(東京大学)、幹事は松本明日香先生(東海学院大学)です。そして、この会報が発行される頃には主催校が発表されているかもしれませんが、第67回大会準備委員会の先生方にもご就任いただく予定です。

今年こそは、晴れやかな空のもと、東京大学で皆さまにお目にかかれますように!!

(おがわ かずみ・愛知淑徳大学)

日本社会心理学会 第66回大会へのお誘い

唐沢 かおり

今年度の大会は、9月20日(土曜)、21日(日曜)の二日間にわたり、東京大学本郷キャンパスにて開催します。準備委員会よりご挨拶とともに、参加のお誘いもかねて、大会についてご案内いたします。

大会プログラムについては、今年度も例年と同様、多様な研究発表と交流の場を提供することを目指しております。会員の皆様による口頭発表、ポスター発表や自主企画シンポジウムでは、日ごろの研究の成果を共有いただき、活発な議論がなされるものと期待しています。また、大会準備委員会企画として、シンポジウムと招待講演の準備を進めております。シンポジウムでは、京都大学の内田由紀子先生と東京大学の吉村有司先生(建築家)をお招きし、「ウェルビーイング」をテーマに、社会心理学と他分野との連携、またそれによる実践的な貢献の可能性についてご議論いただきます。お二人で対談いただく時間も取る予定で、そこではフロアの皆様も交えて交流できればと考えています。招待講演は、アルバータ大学の増田貴彦先生をお迎えし、近年展開しておられるモンゴル研究の成果に基づき、文化と認知研究の今後の方向性についてご講演いただく予定です。最前線の研究成果を踏まえたお話は、多くの聴衆の皆様の興味関心を喚起すると期待しています。

今年度の開催は、すでにお伝えしている通り、対面開催を予定しております。幸い、開催地の東大本郷キャンパスは、交通の利便性が高いと同時に、訪れる場としての魅力も持ち合わせています。お時間が許せば、東京大学のキャンパスにて、ご友人、また新たに知り合った方とのひと時を楽しんでいただければと思います。

会場となるのは、文学部のある法文1号館と2号館。冠木(かぶき)門という伝統的な門形式を持つ東大正門から入っていただくと、正面に安田講堂が見えますが、その左右にある建物です。アーケードを中央に持つ歴史ある建築物で、国の登録有形文化財にも指定されております。法文2号館は、奥に入り込むと迷路のようになっており、らせん状の階段の横に、いきなり仏像が…というような体験スポット(?)もあります。また近くには三四郎池、(残念ながら耐震の関係で閉じていますが)赤門などの「観光名所」もごございます。法文1号館、2号館の設備の古さは否めませんが、建物の外観、内観、東大内の散策をお楽しみいただければと思います。

今年度の大会の準備については、西田公昭会長、担当常任理事の小川一美先生をはじめとする学会執行部のご支援をいただきつつ、実務的なサポートを国際文献社様やPCOのFloat Leaf creation様をお願いしています。なお、西田会長は、現在、サバティカル期間を利用して、東京大学文学部に研究員として在籍中という事情もあり、今年度大会の準備にも「がっつり」関わっていただいております。休憩室では、西田会長特別コーヒーも提供いただけるとのことで、ご期待ください(こちらは、2019年度の学会大会の休憩室でも提供されたもので、ご記憶の方も多いかと思えます)。

大会の準備にあたり、準備委員会一同、皆様にとって有意義な時間を提供できるよう努めてまいります。今年度の大会が、充実した内容となることを願いつつ、多くの会員各位の参加を、心よりお待ちしております。

(からさわ かおり・東京大学・日本社会心理学会第66回大会準備委員長)

第12回春の方法論セミナー報告・参加記

第12回春の方法論セミナーは、「心理学実験 Updated ;コミュニケーション研究の最前線にみる研究法の継承と発展」と題して2025年3月13日(木)に対面(大阪工業大学 梅田キャンパス 2階セミナー室 201・202) + zoom 中継のハイブリッド方式で開催されました。ご参加くださった方の中から参加記の執筆をお願いいたしました。



対面会場写真

セミナーWeb サイト : <https://sites.google.com/view/jssp2024nendoseminar/home>

参加記

笠原 伊織

今回、第12回春の方法論セミナー「心理学実験 Updated:コミュニケーション研究の最前線にみる研究法の継承と発展」に参加する機会を得ることができました。まず初めに、本セミナーを企画・運営してくださった先生方と、貴重なご講演をいただきました藤原先生、水野先生に心より御礼申し上げます。

セミナーでは、まず藤原先生から「コンピュータを用いた表情解析とその応用」と題して、無料の表情解析ツールキットである OpenFace 2.2.0 (Baltrušaitis et al., 2018) についてご紹介いただきました。OpenFace は、GitHub からファイルをダウンロードして展開する形式で、PowerShell を用いてモデルを追加ダウンロードする必要があるなど、慣れていないとやや難しい部分がありましたが、講演では、実際に OpenFace をインストールするところからスタートしていただけたため、比較的スムーズにツールキットを手元に準備することができたと思います(ただ、私自身は経験しませんでした。PowerShell に関してトラブルを経験された方もおり、新しく何かを導入する際の難しさを感じました)。次に、表情解析の研究においてコンピュータを利用することのメリットや注意点についてお話しいただき、その後、デモ画像や動画を用いて実際に表情解析をおこない、OpenFace から出力される値の意味や解釈などについて解説していただきました。最後に、Python のライブラリ等を用いた「感情」の推定についてもお話しいただきました。この点に関して、OpenFace では感情に関する何らかのスコアは算出しないが、表情に関する情報から議論できることは多い、というお話が印象に残っています。逆に、コンピュータ上で推定・出力された「感情スコア」が何を意味しているのかについては慎重に検討する必要がある、という指摘も、大変示唆に富むものであったと思います。

続けて、水野先生からは「オンライン実験における参加者とのコミュニケーション」と題して、オンライン上で実験をおこなうときの参加者とのコミュニケーション方法についてお話しいただきました。まず、オンライン上での実験には多くのメリ

ットがある一方、複雑な内容の場合は特に、説明を理解してもらいにくいことやネット接続のトラブルなど、さまざまな問題が生じることを踏まえ、実験の説明の分かりやすさを高めるという観点と、実験参加へのハードルを下げるという観点から、先生ご自身の研究や取り組みに関して詳しくご紹介いただきました。実際に実験参加者への説明動画を拝見した感想としては、統計的な分析結果はさておき、確かに文字と図だけの説明よりも、音声や動画、効果音があると、説明が理解しやすく、何より丁寧な印象を受け、参加へのモチベーションが高まりやすいのではないかと感じました。最後に、実験参加へのハードルを下げる試みとして、クラウドソーシングサービス上での設定やメールへの対応、参加者募集フォームの構築など、さまざまな tips を紹介していただき、個人的に参考になる部分が多々ありました。お話しいただいた内容は主にリアルタイムでの相互作用を伴う経済実験のようなシチュエーションに着目したものでしたが、それ以外の分野でも、オンライン上で実験や調査をおこなう研究者全員にとって非常に役に立つ実践的な内容だったと思います。

最後になりましたが、改めまして、ご講演いただいた先生方、および本セミナーを企画・運営してくださった先生方に心より御礼申し上げます。

(かさはら いおり・近畿大学)

第 33 期役員選挙のご報告

結果報告

第 33 期選挙管理委員会委員長 浦 光博

第 33 期の役員選挙は、第 65 回大会総会で承認いただきました役員選挙規程に基づき実施いたしました。また、先回に引き続き投票方法はオンライン投票となりました。投票期間は 2024 年 11 月 1 日から 11 月 21 日までとし、期間中、投票を促すメールを 2 回お送りしました。役員選挙の開票に際しては、選挙管理委員 4 名（浦光博、古谷嘉一郎、増井啓太、谷口淳一）と事務局担当（古川佳奈）が集計結果を確認し、当選者、次点者、次々点者を決定いたしました。いずれの選挙におきましても、同数の得票に関しては、複数の選挙管理委員により抽選を行いました。以下、開票結果をご報告いたします。

役員選挙における有権者数は 1320、投票総数は 408、投票率は 30.9%となりました。投票率は第 28 期が 23.4%、第 29 期が 23.3%、第 30 期が 26.7%、第 31 期が 19.9%、第 32 期が 22.6%でしたので、今期の選挙では投票率がかなり上昇したといえます。区分ごとの得票数、投票率は、表 1 をご覧ください。開票は 2024 年 11 月 28 日に、会長、全国区理事、地方区理事、監事に分けて行いました。それぞれの区分での開票時点または最終時点での当選、次点、次々点までの結果は、表 2 から表 8 をご覧ください。得票が同数の場合、重複しての当選の場合などについては、役員選挙規程に則って処理しました。開票終了後、当選者に就任の諾否を尋ねたところ、すべての当選者から就任の承諾を得ることができ、2024 年 12 月 11 日にすべての役員（会長、理事、監事）が確定しました。

第 33 期の会長に当選した西田公昭氏から、編集担当常任理事として相馬敏彦氏、事務局担当常任理事として高橋尚也氏、任意の担当の常任理事として宮本聡介氏の指名がありました(選挙規程第 10 条第 2 項)。2024 年 12 月 18 日から 2024 年 12 月 24 日の期間に、理事による信任投票を実施しました。その結果、不信任 0 票、棄権 1 票、白票 0 票、その他すべて信任票となり、3 氏とも信任されました (表 9)。

残り 3 名の常任理事を選出するために、2024 年 12 月 27 日から 2025 年 1 月 9 日まで理事による互選を実施しました。その結果、当選した上位 3 名に就任の諾否を尋ねたところ、すべての当選者から就任の承諾を得ることができ、最終的に 1 月 14 日

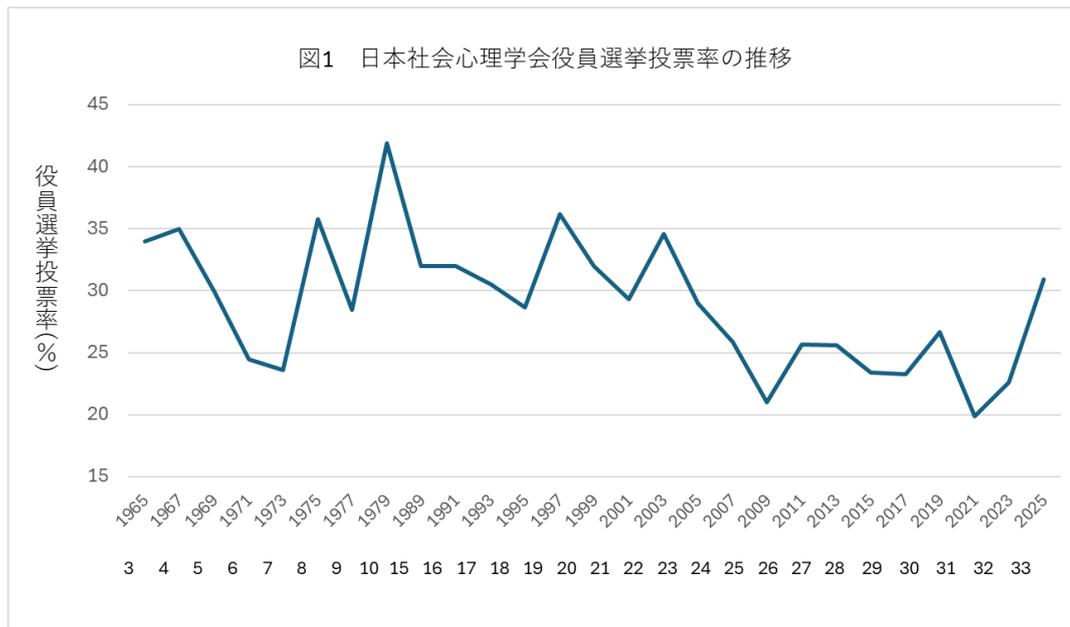
をもって、内田由紀子氏、山下玲子氏、小川一美氏の3氏の常任理事を確定しました(表10)。

以上で、第33期の役員が全員確定したことをご報告いたします。

選挙管理委員会からのコメント

今回の投票率は30.9%でした。投票率が30%を越えたのは2002年度に行われた第22期の役員選挙(34.6%)以来22年ぶりのことです。今回は投票の呼びかけを2回行いました。このことが奏功したのかもしれませんが、このように言うと、今回の投票率はそれなりに高い水準にあるように思えるかもしれませんが、長期的に見ると決して高くはありません。

過去の役員選挙の投票率を調べてみました。学会Webページから会報のバックナンバーを見ることができます(1956年の第1号から2011年の189号までは会員専用ページから、それ以降は広報のページから)。会報に記されている各期の投票率をグラフにしたのが図1です(第1期と第2期、第11期から第14期の投票率は会報に記載されていませんでしたので省いています)。図から見て取れることはいくつかありますが、大きな流れとしては2003年を境に全体的に投票率が低下していることが分かります。平均値を求めてみると、全体を通しての平均投票率は29.0%、2003年以前は31.8%、2005年以降は24.3%でした。



社会心理学事典(2009年刊行, 日本社会心理学会編, 丸善)にある「日本社会心理学会の活動と展望: 日本社会心理学会小史」に本学会の会員数の推移が示されています。これを見ると、学会設立以来、会員数は比較的順調に右肩上がり増加していたのですが、ちょうど2003年あたりから高止まりになっていることが分かります。これと軌を一にするように、投票率が低下しています。

これらのことをどう捉えればよいのでしょうか。成熟による安定と見るか、それとも停滞による無関心と見るべきなのでしょう。もちろん、数値の推移から読み取れる相関関係に過ぎないので因果の方向性は分かりませんが、そもそも因果関係があるかさえよく分からないのですが、会員数が右肩上がり増加していた時期の本学会の雰囲気を知る者からすると、最近の本学会の落ち着きぶりに少なからぬ寂しさを覚えます。

(うらみつひろ・追手門学院大学)

表1 第33期役員選挙投票数

区分	有権者数	投票者数	投票率
会長	1320	408	30.9%
全国区理事	1320	408	30.9%
地方区理事(北海道・東北)	93	47	50.5%
地方区理事(関東)	616	166	26.9%
地方区理事(中部・近畿)	456	146	32.0%
地方区理事(中国・四国・九州・沖縄)	150	48	32.0%
監事	1320	408	30.9%
海外	5	1	20.0%

表2 第33期役員選挙開票結果(会長)

氏名	得票数	順位	当選者
西田 公昭	139	1	○
亀田 達也	31	2	次点
三浦 麻子	29	3	次々点
小計	199		
次々点未満	197		
白票	12		
合計	408		

表3 第33期役員選挙開票結果(全国区理事)

氏名	得票数	順位	当選者
相馬 敏彦	112	1	○
小林 哲郎	109	2	○
三浦 麻子	28	3	○
大坪 庸介	25	4	○
金政 祐司	13	5	○
村本 由紀子	12	6	○
北村 英哉	11	7	○
藤島 喜嗣	10	8	次点
尾崎 由佳	10	8	次々点
小計	330		
次々点未満	379		
白票	107		
合計	816		

注: 第8位は抽選による。

表4 第33期役員選挙開票結果
(地方区理事:北海道・東北)

氏名	得票数	順位	当選者
竹澤 正哲	16	1	○
荒井 崇史	4	2	次点
福野 光輝	4	2	次々点
小計	24		
次々点未満	17		
白票	6		
合計	47		

注:第2位は抽選による。

表5 第33期役員選挙開票結果
(地方区理事:関東)

氏名	得票数	順位	当選者
村本 由紀子	37	1	全国区で当選
武田 美亜	31	2	○
小城 英子	30	3	○
平石 界	13	4	○
藤島 喜嗣	11	5	次点
石黒 格	11	5	次々点
小計	133		
次々点未満	259		
白票	106		
合計	498		

注:第5位は抽選による。

表6 第33期役員選挙開票結果
(地方区理事:中部・近畿)

氏名	得票数	順位	当選者
小林 知博	41	1	○
竹橋 洋毅	31	2	○
金政 祐司	10	3	全国区で当選
三浦 麻子	8	4	全国区で当選
橋本 博文	7	5	次点
木村 昌紀	6	6	次々点
小計	103		
次々点未満	155		
白票	34		
合計	292		

表7 第33期役員選挙開票結果
(地方区理事:中国・四国・九州・沖縄)

氏名	得票数	順位	当選者
三船 恒裕	11	1	○
縄田 健悟	6	2	次点
坂田 桐子	4	3	次々点
小計	21		
次々点未満	20		
白票	7		
合計	48		

表8 第33期役員選挙開票結果(監事)

氏名	得票数	順位	当選者
唐沢 穰	22	1	○
山口 裕幸	14	2	次点
岡 隆	11	3	次々点
小計	47		
次々点未満	251		
白票	110		
合計	408		

表9 第33期役員選挙開票結果
(常任理事信任投票)

氏名	得票数*	信任
高橋 尚也	27	○
相馬 敏彦	27	○
宮本 聡介	27	○

* 棄権1票

表10 第33期役員選挙開票結果(常任理事)

氏名	得票数	順位	当選者
内田 由紀子	17	1	○
山下 玲子	17	1	○
小川 一美	16	3	○

『社会心理学研究』掲載（予定）論文

第41巻第1号（2025年7月刊行予定）

【原著論文】

津村 健太 職場における被排斥経験尺度日本語版(WOS-J)の作成

白岩 祐子 霊魂の在処：戦没者遺族からみた遺骨の意味

【資料論文】

崔 邱好・石井 敬子 セルフディスタンシングとネガティブ経験に対する内省の関連：赦しや包括的思考を含めた検討

岩田 和也・清水 裕士 メタ規範の多元的無知に関する検討：ソーシャルメディアにおける罰強度の適切性に関する過大推測

編集後記

今回もお忙しい中ご寄稿いただきました先生方に、心より感謝申し上げます。

会報を編集していると、あらためて「社会心理学会のこれから」に思いをはせることとなります。大会、学術誌、広報——いずれにも共通する原点は、学会が研究にまつわる情報交換と、それによる学術の進展をめざしているという点にあるのではないのでしょうか。そして交換される有益な情報には、研究成果そのものに加えて、新たな成果を生み出している研究者の人となりを知ること含まれていると思います。

会報を通じて、会員の皆様方が、学会の一員としての機会と恵みを感じていただけましたら幸いです。（内田由紀子）

今号の会報、編集に携わらせていただきました。メーリングリストに「刊行のお知らせ」とあれば、真っ先にPDFにアクセスする、そんな私ですが、今回は“刊行前”に会報を読ませていただけるという特別な機会に恵まれました。ちょっぴり得した気分です。（橋本博文）